

●事例報告

包括システムにおける人間表象反応の再検査研究

A test-retest analysis of HR in the comprehensive Rorschach system

小西 宏幸

(大阪市児童通所ルーム)

Hiroyuki Konishi (Attendance institution for non school attendance children in Osaka city)

要 旨

本研究の目的は、包括システムによるロールシャッハ・テストの人間表象反応(HR)に関する再検査一貫性について調査することである。19歳以上の非患者である研究協力者55名(男性8名、女性47名)を対象に、6～9カ月の間隔期間で、ロールシャッハ・テストの検査-再検査を実施した。両検査時における主要変数についての記述的統計と再検査相関係数を算出した。次に、両検査時における人間表象反応の比率データであるGHR:PHRを比較した。以下のような結果が得られた。初回検査時におけるGHRの範囲は0から15であり、その平均値が4.61(標準偏差:2.97)、PHRの範囲は0から6であり、その平均値が2.10(標準偏差:1.48)であった。再検査時におけるGHRの範囲が1から11、平均値は4.56(標準偏差:2.32)、PHRの範囲が0から9、その平均値は2.30(標準偏差:2.08)であった。対応のあるt検定とWilcoxonの符号和検定の結果、両検査時におけるこれらの数値に有意差は認められなかった。GHRとPHRの再検査相関係数(r)は、それぞれ.64と.49を示した。GHR:PHRについては、55名中34名の対象者が、両検査時を通じて同一の方向性を示した。一方、55名中8名の対象者は再検査時に方向性が逆転した。つまり、記録の62%が両検査時を通じて同じ方向性を示したという水準は、体験型や基礎体験(FM+m:Sum SH)に代表される他の多くのロールシャッハ指標とほぼ同様であった。

Abstract

Test-retest consistency of the Human Representational Response (HR) in the comprehensive Rorschach system was analyzed. Nonpatient participants ($n = 55$; 8 males and 47 females, over 19 years old) were tested using the Rorschach and retested following an interval of between 6 and 9 months. The descriptive statistics and the correlation coefficients of major Rorschach variables for the two test sessions were calculated and the GHR:PHR ratio of HR for the both tests were compared. Results indicated the following: In the first test session, the mean GHR was 4.61 (SD = 2.97; range = 0-15), and PHR was 2.10 (SD = 1.48; range = 0-6). In the second test session, mean GHR was 4.56 (SD = 2.32; range = 1-11), and PHR was 2.30 (SD = 2.08; range = 0-9). T test and Wilcoxon's signed rank sum test indicated that these values were not significant for the test or retest conditions. The retest correlation coefficients (r) of GHR and PHR were .64 and .49. There were 34 records out of 55 showing the same direction for GHR:PHR ratio in the two test conditions, whereas, 8 out of 55 records had a different direction at the retest. These results indicate that 62% of the protocols showed the same direction pattern in both tests similar to most other Rorschach indexes such as EB style and eb (FM+m:Sum SH).

キーワード：人間表象反応、ロールシャッハ・テスト、再検査研究

key words: HR, Rorschach test, retest study

I. はじめに

包括システムの改訂は、頻繁に行われてきた。Exner (2003)の文献でも、いくつかの変数が削除・追加されている。そして、新たな指標の1つに人間表象反応(Human Representational Responses : 以下, HR)があり、本邦では、1999年の包括システムによる日本ロールシャッハ学会におけるワークショップで初めて紹介された。

ただし、HRもまったく目新しいものではなく、Perry & Viglione(1991)のEII (Ego Impairment Index : 自我損傷指標)から発展してきた。さらに、このEIIの基盤ともいえる対象関係論をロールシャッハ・スコアに表現する試みは、かなり以前から行われてきた(Beres, 1956 ; Blatt, Brenneis, Schimek & Glick, 1976 ; Urist, 1977 ; Urist & Shill, 1982など)。またEIIは、包括システムのM-やLEVEL2などの変数も利用しており、この指標は思考や感情、対人関係など広範な情報を反映する。そして、Burns, & Viglione (1996)がEIIを発展させて作成したHEV (Human Experience Variable : 人間体験変数)は、特に対人関係の解釈に役立つ公式であり、1997年には係数値が修正されている。

包括システムのHRは、HEV算出に使用される良質人間体験反応(Good Human Experience Response)と貧質人間体験反応(Poor Human Experience Response)の分類法に類似している。なおHRとHEVの比較は、Viglione et. al. (2003)に詳しい。

つまり、HRの良質人間表象反応(Good Human Representational Responses : 以下, GHR)と貧質人間表象反応(Poor Human Representational Responses : 以下, PHR)の起源はHEVともいえる。この変数は、GHR:PHRの形式で表記し、GHRが多ければ他者から肯定的に認知される傾向にあり、PHRが多

ければ他者から否定的に認知されると解釈される。Exner (1999)は"peer nomination study"を用いて「この中で一緒にパーティに行きたいと思う人は誰ですか?」「生徒会の役員を選ぶなら誰でしょうか?」などの項目では、GHRの多い学生が指名されやすく、「一番好かれそうにない人は誰ですか?」「一番信用できない人は誰ですか?」などの項目では、PHRの多い学生が指名されやすいことを示した。

ところでGHRとPHRは、PHRやPSVなどと同様、特殊スコアの1つである。しかし、HRは決定因子や反応内容などの要因だけでなく、COPやAGなど、他の特殊スコアに対しても評価される。つまり、ある特殊スコアには、さらに特殊スコアのGHRとPHRがコードされる。したがって、多くの変数を総合して解釈に用いるので、DEPIやCDIなどの特殊指標に類似している。また、GHR:PHRの形式においては、体験型やa:pなどと同様、比率データである。要するに、コードとしては特殊スコアであり、構造データとしては比率データであり、性質的には特殊指標といえ、ロールシャッハ変数としては、やや特殊である。

II. 目的

いかなる指標についてもいえることではあるが、わが国で包括システムを用いるためには、日本人対象者の資料を基に、その特徴を十分に考慮して、さまざまな検討を行うことが不可欠である。

ロールシャッハ・テスト(以下、ロ・テスト)が対象者の個性を反映していると考えられるならば、いかなる変数でも、検査時における心理状態を示しているものなのか、あるいは、継時的に安定した性格特性を示しているものなのかを検証しないかぎり、有効な解釈は行えない。従来、継時的な一貫性の探究は、心理検査におけ

る信頼性の問題としても考えられてきた。

ロ・テストの信頼性や妥当性を検証する方法は多様であり、再検査を用いることもその1つである。いくつかの包括システムの再検査研究では、非患者成人は、多くの変数において $r > .75$ の基準に該当し、再検査信頼性は高いと示された(Exner, Armbruster & Viglione, 1978; Exner, 1988など)。これに対して、Lilienfeld, Wood & Garb (2000)は、包括システムの再検査研究に関する文献レビューを行った結果、包括システムの再検査信頼性は保証されないと主張した¹⁾。

一方、HRに限ったことではないが、本邦での包括システムに関する再検査研究はかなり少ない(森田, 1995; 小西, 1999bなど)。包括システムにおける再検査信頼性の問題は、さらなる検討が必要である。本研究では、HRをより有効に用いるために、基礎研究の1つとして再検査研究を行う。というのも、HRが対人関係に関する指標ならば、多少なりとも性格特性としての側面は無視できない。つまり、性格特性を反映する指標の場合、それなりの再検査一貫性は保証されることが期待される。もっとも、既述のように、HRはいくつもの変数を合成した指標なので、個々の変数の再検査一貫性の検討も重要であろう。

III. 方法

1. 対象者

19～54歳の非患者成人で男性8名、女性47名の計55名である。対象者群の平均年齢(初回検査時)は26歳(標準偏差8.53)である。このうち21名が大学生であり、34名が社会人(専業主婦とパート・タイマーを含む)である。なお、初回検査時における既婚者(離婚や死別は除外)は14名である。

両検査時における対象者の生活環境の変化に

関しては、再検査の終了時に、検査者が簡単な形式で、口頭で質問した。

初回検査時と再検査時の間に転居した対象者は55名中3名であった。いずれの該当者も同じ都道府県内での転居であった。このうち2名が結婚による転居であった。また、再検査時までに妊娠した対象者は1名(再検査時には妊娠1カ月)であり、出産した事例はなかった。

初回検査時に大学生、再検査時に社会人の事例はなかった。また、初回検査時に19歳の対象者は、いずれも社会人である。なお、社会人で、転職した事例はなかった。

さらに、初回検査時から再検査時までに、家族をはじめとする肉親や親しい友人と死別した事例や離婚した事例、入院生活を経験した事例はなかった。

2. 手続き

同一の検査者がすべての対象者に対して、個人法によってロ・テストを実施した。初回検査時と再検査時の検査間隔期間は6～9カ月である。

検査の実施法とコード化についてはExnerの包括システムを日本人対象者に適用した高橋・西尾(1994)、高橋・高橋・西尾(2002)の基準に準拠した。

3. 分析方法

両検査時における主要変数の記述的統計を求め、再検査時における統計値の変動を検討した。なお、初回検査時と再検査時の数値の差の分布について尖度と歪度を算出した結果、そのいずれかの絶対値が1を超える場合、Wilcoxonの符合化順位検定を用い、1を超えない場合、対応のあるt検定を用いた。

次に、主要変数の再検査相関係数を求めた。なお、頻度データの性質上、外れ値に対する頑強性を考慮すべき変数が多く含まれているため、Pearsonの γ と併せてKendallの τ も算出

した。

これらの予備的解析の後、両検査時におけるGHR:PHRへの該当条件ごとに頻度を求め、その出現傾向を比較した。各条件のカテゴリは、 $GHR > PHR$, $GHR < PHR$, $GHR = PHR$, $GHR + PHR < 3$ の4つに分類し、対象者ごとの変化を調べた。また、 $GHR > PHR$ については、さらに、 $GHR > PHR + 1$ の条件も検討した。

なお、 $GHR + PHR < 3$ に該当する場合、HRの出現頻度が少なすぎるため、GHR:PHRを妥当に解釈できない。そこで、 $GHR:PHR = 0:0$ や $GHR:PHR = 1:1$ を示した対象者は、 $GHR = PHR$ ではなく、 $GHR + PHR < 3$ として評価した。同様に、 $GHR:PHR = 1:0$ や $GHR:PHR = 2:0$ を示した対象者、 $GHR:PHR = 0:1$ や $GHR:PHR = 0:2$ を示した対象者も、 $GHR > PHR$ や $GHR < PHR$ ではなく、 $GHR + PHR < 3$ として評価した。

IV. 結果

1. 再検査時における統計値の変動

表1は、両検査時における主要変数の記述的統計、および再検査時における増減に関する検定結果である。

この結果が示すように、再検査時に有意な変動が認められた変数には、DとAd, An, Cgがあった。GHRとPHRには有意な増減は認められなかった。

2. 再検査相関係数

主要変数の再検査相関係数については、表2のような結果が得られた。

GHRもPHRも他の変数に比して、著しく低い相関係数値とはいえないが、 $r = .70$ の水準には達しなかった。

3. GHR:PHR

表3に両検査時におけるGHR:PHRの頻度の

分布を示した。また、表4に再検査時におけるGHR:PHRの方向性的変動についての頻度を示した。

いずれの条件においても、両検査時を通じて、該当頻度の大きな差異は認められなかった。 $GHR > PHR + 1$ の条件では、全体の50%以上が該当した。さらに、 $GHR > PHR$ への該当頻度は、全体の約70%であった。また、全体の約10%は $GHR = PHR$ を示し、 $GHR < PHR$ では、全体の約15%が該当した。一方、解釈上、GHR:PHRを検討するには信頼性が低いとされる、HRの総和が3に満たない対象者は、初回検査時では3.6%、再検査時では全体の約6%が該当した。

V. 考察

1. GHRとPHRの代表値について

HRは、GHR:PHRとして解釈されるので、GHRとPHRをそれぞれ個別に検討することはない。ただし、各コードの代表値の把握は重要である。初回検査時と再検査時に見かけ上の数値の差異は存在するが、有意な増減は認められない。平均値だけでなく、中央値や最頻値なども考慮すると、今回の結果では、非患者成人における代表値としては、GHRが4~5、PHRが1~2といえる。また、小西(2002, 2003b)によると、平均域のRにおけるLの高い記録の中央値や最頻値などを検討すると、GHRが3~4、PHRが1~2となっている。PHRについては、本研究とはほぼ同様の水準ではあるが、GHRの頻度がやや少ない。

対照的に、Exnerが示した代表値はGHRの5、PHRの1である。わずかではあるが、日本人におけるGHRの少なさとPHRの多さが認められる。PHRを規定する条件のうちで、日本人の反応傾向として考えられる要因は、顔反応の多さであろう。というのも、顔反応がHdの

表1 両検査時における主要変数の記述的統計
 {上段：初回検査時(N = 55) / 下段：再検査時(N = 55)}

変数	Mean (SD)	Max	Min	Median	Mode	FREQ	SK	KU	*Prob.
R	22.65 (5.42)	38.00	14.00	21.00	20.00	55	.78	.08	
	23.96 (7.72)	45.00	14.00	22.00	14.00	55	.58	-.47	
W	10.70 (4.17)	21.00	3.00	10.00	12.00	55	.58	.23	
	10.50 (4.21)	27.00	3.00	10.00	12.00	55	1.32	3.89	
D	9.92 (4.71)	20.00	2.00	10.00	12.00	55	.31	-.70	* (t)
	11.05 (6.07)	24.00	3.00	10.00	6.00	55	.44	-.91	
Dd	2.01 (1.73)	8.00	0.00	2.00	1.00	46	1.33	2.20	
	2.40 (1.93)	8.00	0.00	2.00	2.00	47	1.04	.93	
S	2.83 (1.98)	10.00	0.00	2.00	2.00	50	1.18	2.13	
	3.21 (1.95)	8.00	0.00	3.10	2.00	51	.52	-.12	
DQ +	4.98 (2.89)	15.00	0.00	4.00	3.00	54	1.11	1.82	
	5.32 (2.54)	13.00	0.00	5.00	4.00	54	.45	.41	
DQo	16.30 (5.21)	31.00	5.00	15.00	13.00	55	.66	.30	
	17.29 (7.23)	33.00	5.00	16.00	11.00	55	.37	-.96	
DQv	1.25 (1.84)	8.00	0.00	0.00	0.00	27	1.89	3.50	
	1.25 (1.46)	8.00	0.00	1.00	0.00	34	2.01	6.86	
DQv/ +	0.10 (0.36)	2.00	0.00	0.00	0.00	5	3.64	13.95	
	0.09 (0.29)	1.00	0.00	0.00	0.00	5	2.92	6.81	
M	3.76 (2.47)	11.00	0.00	3.00	3.00	51	.79	.63	
	3.70 (1.90)	9.00	1.00	3.00	3.00	55	.72	.09	
FM	2.92 (1.82)	7.00	0.00	3.00	4.00	51	.28	-.71	
	2.67 (1.97)	7.00	0.00	2.00	2.00	46	.32	-.96	
m	0.78 (1.24)	5.00	0.00	0.00	0.00	22	1.75	2.44	
	1.10 (1.61)	7.00	0.00	0.00	0.00	27	1.94	3.83	
FM + m	3.70 (2.37)	9.00	0.00	4.00	1.00	53	.34	-.95	
	3.78 (2.77)	12.00	0.00	3.00	2.00	49	.93	.70	
FC	2.09 (1.71)	8.00	0.00	2.00	2.00	46	1.45	3.48	
	1.83 (1.50)	7.00	0.00	2.00	1.00	46	1.21	1.98	
CF	1.68 (1.59)	8.00	0.00	1.00	1.00	43	1.66	4.06	
	1.92 (1.59)	7.00	0.00	2.00	1.00	47	1.47	2.69	
C	0.12 (0.33)	1.00	0.00	0.00	0.00	7	2.29	3.41	
	0.05 (0.22)	1.00	0.00	0.00	0.00	3	4.03	14.81	
CF + C	1.80 (1.58)	8.00	0.00	2.00	1.00	45	1.58	2.50	
	1.98 (1.64)	7.00	0.00	2.00	1.00	47	1.35	2.12	
WSumC	2.16 (1.60)	7.00	0.00	2.25	2.50	55	1.16	2.25	
	2.46 (1.47)	6.50	0.00	2.25	2.00	55	.89	1.34	
SumC'	1.74 (1.70)	7.00	0.00	1.00	0.00	39	1.02	0.74	
	1.78 (1.62)	6.00	0.00	2.00	0.00	39	.65	-.40	
SumT	0.32 (0.66)	3.00	0.00	0.00	0.00	13	2.21	4.80	
	0.32 (0.66)	2.00	0.00	0.00	0.00	12	1.82	1.88	
SumV	0.27 (0.59)	2.00	0.00	0.00	0.00	11	2.07	3.20	
	0.20 (0.44)	2.00	0.00	0.00	0.00	10	2.16	4.20	
SumY	0.76 (0.94)	4.00	0.00	0.00	0.00	27	1.18	1.23	
	0.70 (0.93)	4.00	0.00	0.00	0.00	26	1.46	2.11	
SumSH	3.10 (2.46)	9.00	0.00	2.00	2.00	49	.73	-.53	
	3.01 (2.33)	9.00	0.00	3.00	1.00	47	.62	-.31	
Fr + rF	0.10 (0.36)	2.00	0.00	0.00	0.00	5	3.64	13.95	
	0.21 (0.68)	3.00	0.00	0.00	0.00	6	3.26	10.01	
FD	0.81 (0.79)	3.00	0.00	1.00	1.00	34	.80	.35	
	0.65 (0.75)	2.00	0.00	0.00	0.00	27	.67	-.90	

表1 両検査時における主要変数の記述的統計
 上段：初回検査時(N = 55) / 下段：再検査時(N = 55)

変数	Mean (SD)	Max	Min	Median	Mode	FREQ	SK	KU	# Prob.
F	10.80 (4.41)	23.00	4.00	10.00	11.00	55	.76	.27	
(2)	12.14 (6.19)	26.00	1.00	12.00	15.00	55	.28	-.81	
	6.49 (2.76)	13.00	1.00	6.00	5.00	55	.08	-.50	
	7.47 (3.47)	18.00	1.00	7.00	6.00	55	.59	.50	
3r + (2) /R	0.30 (0.12)	0.69	0.05	0.32	0.25	55	.36	1.23	
	0.34 (0.13)	0.79	0.06	0.32	0.29	55	.57	1.16	
LAMBDA	1.14 (0.88)	5.25	0.25	1.00	0.54	55	2.36	7.86	
	1.09 (0.60)	3.29	0.07	1.00	1.50	55	.90	1.77	
EA	6.68 (3.31)	17.00	2.00	6.00	6.00	55	1.21	1.72	
	6.63 (2.88)	17.00	1.50	6.00	4.00	55	.98	1.84	
es	6.81 (3.88)	15.00	1.00	6.00	4.00	55	.29	-1.04	
	6.80 (3.73)	17.00	1.00	6.00	6.00	55	.81	.28	
D Score	0.03 (1.07)	2.00	-3.00	0.00	0.00	55	-.63	1.66	
	-0.05 (1.00)	2.00	-3.00	0.00	0.00	55	-.67	1.84	
Adj D	0.20 (1.02)	3.00	-3.00	0.00	0.00	55	-.09	2.02	
	0.25 (1.09)	3.00	-3.00	0.00	0.00	55	-.00	.93	
active	3.80 (3.12)	16.00	0.00	3.00	2.00	52	1.61	3.39	
	3.60 (2.68)	13.00	0.00	3.00	2.00	52	1.26	1.96	
passive	3.72 (2.16)	10.00	0.00	3.00	3.00	54	.69	.20	
	3.94 (1.82)	9.00	1.00	4.00	4.00	55	.62	.31	
Ma	1.87 (1.55)	6.00	0.00	2.00	1.00	45	.92	.44	
	1.70 (1.38)	6.00	0.00	1.00	1.00	45	.98	1.01	
Mp	1.90 (1.55)	6.00	0.00	2.00	1.00	45	.86	.33	
	2.03 (1.15)	4.00	0.00	2.00	1.00	51	.15	-.82	
Intellect	1.09 (1.20)	4.00	0.00	1.00	0.00	55	.93	-.04	
	0.98 (1.20)	5.00	0.00	1.00	0.00	55	1.66	2.92	
Zf	13.18 (4.34)	24.00	3.00	13.00	15.00	55	.39	.53	
	13.07 (4.61)	30.00	4.00	13.00	15.00	55	1.08	3.33	
Zd	-0.71 (5.14)	14.00	-14.00	-0.50	-0.50	55	-.04	1.41	
	-0.67 (3.84)	6.50	-12.50	-0.50	0.00	55	-.54	.56	
Blends	3.01 (2.13)	9.00	0.00	3.00	1.00	52	.97	.67	
	2.74 (2.46)	10.00	0.00	2.00	1.00	45	.86	.05	
CSB	0.45 (0.60)	2.00	0.00	0.00	0.00	22	.96	-.01	
	0.47 (0.74)	3.00	0.00	0.00	0.00	19	1.50	1.66	
Afr	0.51 (0.21)	1.60	0.25	0.47	0.54	55	2.54	10.40	
	0.49 (0.14)	0.79	0.25	0.48	0.50	55	.37	-.55	
Popular	5.23 (1.93)	10.00	2.00	5.00	5.00	55	.38	-.33	
	5.38 (2.34)	12.00	1.00	5.00	4.00	55	.53	.09	
X + %	0.69 (0.13)	1.00	0.30	0.71	0.80	55	-.66	.62	
	0.69 (0.17)	1.00	0.27	0.67	1.00	55	.11	-.35	
F + %	0.70 (0.16)	1.00	0.25	0.69	0.67	55	-.36	.24	
	0.68 (0.16)	1.00	0.27	0.68	0.60	55	-.24	.31	
Xu%	0.20 (0.11)	0.56	0.00	0.18	0.17	55	.82	.49	
	0.22 (0.11)	0.44	0.00	0.22	0.14	55	.28	-.74	
XA%	0.90 (0.07)	1.00	0.70	0.91	1.00	55	-.86	.66	
	0.89 (0.07)	1.00	0.72	0.88	1.00	55	-.33	-.43	
WDA%	0.90 (0.07)	1.00	0.69	0.90	1.00	55	-.92	1.28	
	0.89 (0.07)	1.00	0.72	0.89	1.00	55	-.32	-.48	
X-%	0.09 (0.07)	0.30	0.00	0.09	0.00	55	.90	.76	
	0.10 (0.07)	0.28	0.00	0.11	0.00	55	.36	-.40	

表1 両検査時における主要変数の記述的統計
 {上段：初回検査時(N = 55) / 下段：再検査時(N = 55)}

変数	Mean (SD)	Max	Min	Median	Mode	FREQ	SK	+ KU	# Prob.
Isolate	0.12 (0.10) 0.14 (0.13)	0.67 0.71	0.00 0.00	0.10 0.12	0.17 0.00	55 55	2.45 2.43	9.90 7.34	
H	2.80 (1.83) 2.83 (1.90)	10.00 10.00	0.00 0.00	3.00 3.00	2.00 3.00	51 54	1.24 1.68	3.27 4.07	
(H)	1.29 (1.53) 1.20 (1.28)	7.00 4.00	0.00 0.00	1.00 1.00	0.00 0.00	35 32	1.81 .70	3.85 -.72	
Hd	1.32 (1.01) 1.52 (1.57)	4.00 9.00	0.00 0.00	1.00 1.00	1.00 0.00	44 39	.59 2.04	-.29 7.98	
(Hd)	0.81 (1.09) 0.92 (0.92)	5.00 4.00	0.00 0.00	1.00 1.00	0.00 1.00	29 36	1.97 1.18	4.65 1.63	
ALL H	6.23 (3.28) 6.49 (3.18)	18.00 17.00	1.00 1.00	6.00 6.00	4.00 6.00	55 55	1.51 .69	2.98 .89	
A	7.72 (3.33) 7.74 (3.20)	18.00 18.00	2.00 2.00	7.00 7.00	8.00 7.00	55 55	1.37 .81	2.44 .66	
(A)	0.69 (0.87) 0.60 (0.82)	3.00 3.00	0.00 0.00	0.00 0.00	0.00 0.00	25 23	.99 1.28	-.04 .68	
Ad	2.56 (1.61) 3.18 (2.16)	7.00 9.00	0.00 0.00	2.00 3.00	2.00 2.00	50 50	.52 .57	-.08 -1.18	** (t)
(Ad)	0.38 (0.65) 0.27 (0.52)	2.00 2.00	0.00 0.00	0.00 0.00	0.00 0.00	16 13	1.49 1.81	1.02 2.55	
An	0.49 (0.74) 0.25 (0.67)	3.00 4.00	0.00 0.00	0.00 0.00	0.00 0.00	20 10	1.44 3.81	1.50 17.92	* (s)
Xy	0.10 (0.31) 0.07 (0.26)	1.00 1.00	0.00 0.00	0.00 0.00	0.00 0.00	6 4	2.57 3.38	4.82 9.80	
Cg	1.72 (1.77) 2.20 (1.80)	10.00 8.00	0.00 0.00	1.00 2.00	1.00 1.00	42 47	2.21 1.18	7.83 1.55	* (s)
Fd	0.32 (0.54) 0.32 (0.54)	2.00 2.00	0.00 0.00	0.00 0.00	0.00 0.00	16 16	1.44 1.44	1.23 1.23	
Sum6SpSc	1.38 (1.31) 1.49 (1.51)	4.00 7.00	0.00 0.00	1.00 1.00	0.00 0.00	36 38	.52 1.33	-.93 2.30	
WSum6	3.45 (4.00) 3.74 (4.15)	16.00 19.00	0.00 0.00	3.00 4.00	0.00 0.00	55 55	1.49 1.75	2.16 4.14	
AG	0.34 (0.75) 0.32 (0.77)	3.00 4.00	0.00 0.00	0.00 0.00	0.00 0.00	12 11	2.32 2.87	4.88 9.41	
COP	0.94 (1.00) 0.89 (1.04)	3.00 4.00	0.00 0.00	1.00 1.00	0.00 0.00	30 28	.56 .92	-.99 .04	
MOR	0.76 (1.07) 0.61 (0.82)	4.00 3.00	0.00 0.00	0.00 0.00	0.00 0.00	24 24	1.43 1.23	1.52 .84	
PER	0.16 (0.48) 0.12 (0.33)	2.00 1.00	0.00 0.00	0.00 0.00	0.00 0.00	3 3	3.06 2.42	9.45 4.21	
PSV	0.25 (0.53) 0.29 (0.46)	2.00 1.00	0.00 0.00	0.00 0.00	0.00 0.00	5 7	2.13 .97	4.14 -1.14	
GHR	4.61 (2.97) 4.56 (2.32)	15.00 11.00	0.00 1.00	4.00 5.00	4.00 5.00	53 55	1.44 .45	3.13 -.09	
PHR	2.10 (1.48) 2.30 (2.08)	6.00 9.00	0.00 0.00	2.00 2.00	1.00 1.00	48 46	.54 1.36	-.28 2.21	

注) + SASの定義では、SK = 0, KU = 0が正規分布

*: < .05, **: < .01, (s) : Wilcoxonの符号化順位検定, (t) : 対応のあるt検定

表2 主要変数の再検査相関係数(N = 55)

Variable	γ	τ	Variable	γ	τ
R	.63	.44	X-%	.59	.45
W	.70	.47	Isolate	.73	.41
D	.75	.58	Afr	.36	.25
Dd	.52	.43	PAIR	.36	.32
S	.54	.42	3r + (2) /R	.33	.23
DQ +	.64	.50	EA	.64	.44
DQo	.67	.56	es	.51	.37
DQv	.48	.34	D-Score	.45	.36
DQv/ +	.07	.12	Adj D	.53	.45
P	.62	.44	active	.68	.38
Zf	.73	.47	passive	.38	.25
Zd	.51	.32	Ma	.64	.48
Blends	.47	.36	Mp	.45	.38
CSB	.21	.29	Intellect	.62	.57
Fr + rF	.42	.30	H	.77	.59
FD	.57	.55	(H)	.59	.61
F	.56	.45	Hd	.42	.39
M	.70	.50	(Hd)	.45	.40
FM	.69	.53	ALL H	.71	.53
m	.38	.39	A	.71	.48
FM + m	.55	.44	(A)	.59	.55
FC	.42	.28	Ad	.63	.49
CF	.45	.37	(Ad)	.55	.51
C	.15	.14	An	.49	.46
CF + C	.46	.40	Xy	.58	.58
WSumC	.50	.35	Cg	.60	.50
Sum C'	.31	.31	Fd	.63	.58
Sum T	.63	.56	Sum6 SpSc	.37	.32
Sum V	.49	.47	WSum6	.44	.37
Sum Y	.38	.33	AG	.70	.55
Sum SH	.52	.37	COP	.70	.60
LAMBDA	.44	.33	MOR	.48	.44
X + %	.63	.33	PER	.34	.19
F + %	.48	.32	PSV	-.03	.00
Xu%	.45	.32	GHR	.64	.53
XA%	.58	.44	PHR	.49	.41
WDA%	.50	.41			

場合、形態水準にかかわらずPHRがコードされるからである。また、日本人はあらゆる年齢層を通じてLが高い傾向にあり、Lの高い記録では、Hが少なく、Hdが多い(小西, 1999a, 2003a)。これらの知見は「わずかではあるが、Exnerの示す基準よりも日本人は、GHRが少な

く、PHRが多い」の結果を説明する材料となりうる。

さらに、Exner (2003)の準拠資料によってHRの代表値を検討すると、10歳以降の非患者は、GHRもPHRも非患者成人とほぼ同様の水準である。一方、小西・岸本(2001)によると、

表3 両検査時におけるGHR:PHRの頻度の分布 (N = 55)

	GHR > PHR + 1	GHR > PHR	GHR = PHR	GHR < PHR	GHR + PHR < 3
初回検査時	31	39	6	8	2
再検査時	29	37	4	10	4

表4 両検査時におけるGHR:PHRの両辺の変化 (N = 55)

変化パターン	X	a	b	c	d
	34	8	9	3	1
	X1 = 20	a1 = 5	b1 = 5	c1 = 1	
	X2 = 30	a2 = 3	b2 = 4	c2 = 1	
	X3 = 3			c3 = 1	
	X4 = 1				

* X: 両検査時とも同じ方向性であった頻度

X1: 両検査時とも GHR > PHR + 1 / X2: 両検査時とも GHR > PHR

X3: 両検査時とも GHR < PHR / X4: 両検査時とも GHR + PHR < 3

a: 方向性が逆転した頻度

a1: GHR > PHR → GHR < PHR / a2: GHR < PHR → GHR > PHR

b: いずれかの検査時に GHR = PHR であった頻度

b1: GHR = PHR → GHR > PHR or GHR < PHR / b2: GHR > PHR or GHR < PHR → GHR = PHR

c: いずれかの検査時に GHR + PHR < 3 であった頻度

c1: GHR + PHR < 3 → GHR > PHR or GHR < PHR / c2: GHR > PHR or GHR < PHR → GHR + PHR < 3

c3: GHR > PHR + 1 → GHR + PHR < 3

d: GHR = PHR → GHR + PHR < 3

わが国の高校生におけるGHRの代表値は3, PHRは1~2である。PHRの頻度は成人と大差ないが, GHRの頻度が低い。高校生の年齢層でも, HRだけでなく, LやP, 形態水準など, 成人の基準に達しない変数は多い。一方Exnerは, 多くの変数において, 14歳以降の数値は成人とほぼ同様の基準に達すると主張した。また, 非患者の準拠資料では, 16歳までの基準値は記載されているが, 17歳と18歳の資料は記載されていない。また, 19歳の対象者は, 成人対象者として扱われる(Exner, 2001)。

2. 再検査相関係数

PHRの再検査相関係数がGHRに比してやや低い, これは出現頻度を考慮すれば不思議なことではない。両変数ともに, 顕著に高いとまではいえないが, ロールシャッハ変数としては比較的安定した数値を示した。というのも,

本研究において, RやEAなど, いくつかの主要変数では, 先行研究(森田, 1993; 小西, 1999b, 2000b)に比して, やや低い数値を示した。もちろん, 検査間隔期間をはじめとする諸条件が完全に一致しているわけではないので, 単純に比較はできないが, 他の変数が共変するRやLの再検査一貫性が低い場合, 考慮すべき要因は多い。HRにはMやHなど, 反応スタイルによって出現頻度の共変する変数が含まれている。つまり, RやLにおけるrが.70に達していない条件下では, 今回のGHRとPHRの相関値は, 必ずしも低いとはいえない。ただし, 小西(2002, 2003b)によると, Lの値が大きく増減する再検査データにおいても, GHRは = .59 ~ .64, PHRは = .53 ~ .54と今回の結果と大きな差異は認められない。つまり, ハイラムダ・スタイルの記録でも, 別の検査時におけるHR

は、著しく変動しない可能性が考えられる。

3. GHR:PHRの再検査一貫性について

既述のように、GHR:PHRは対人関係に関する情報を提供する指標である。これが性格特性と関連するならば、仮説としては、本研究の対象である成人年齢層においては、この指標の再検査一貫性が予想される。

今回の結果では、全体の約60%の対象者が両検査時において同じ方向性を示した。この頻度は、本邦の非患者成人では、ハイラムダ・スタイルに該当するか否か、同じ体験型を示すか否かなど、他の比率データが、両検査時を通じて同じ方向性を示す割合に類似している(小西, 2000a, 2000b)。

また、両検査時とも $GHR > PHR + 1$ に該当する対象者は、全体の約40%にとどまった。参考までに、Exner (1999)によると、 $GHR > PHR + 1$ に該当する割合は、非患者成人群で83.4%、パーソナリティ障害群で50.9%、抑うつ群で34.4%、自殺群で25.7%と、対象群によってかなりの差異が存在する。Viglione et al. (2003)は $HRV = GHR - PHR$ の公式を提示しているが、日本人の場合、このHRV値がやや低いといえる。一方、方向性が完全に逆転した頻度は、全体の約15%であった。この方向性が逆転した事例を検討すると、そのほとんどが、 $2:1 \rightarrow 1:2, 4:5 \rightarrow 2:1, 4:2 \rightarrow 2:3, 2:3 \rightarrow 3:1, 5:4 \rightarrow 4:5$ のように、両検査時を通じて、HRVの絶対値が小さかった。そして、 $4:5 \rightarrow 7:4, 15:3 \rightarrow 8:9$ のように、HVR値が、いずれかの検査時には高く、別の検査時には低い事例は少なかった。さらに、 $9:4 \rightarrow 3:6$ といった完全な逆転を示した事例は1名のみであった。

要するに、GHR:PHRの再検査一貫性は著しく低いとはいえないが、HRVの絶対値が小さい場合、頑強な安定性は保証されない。これは、 $GHR > PHR + 1$ に両検査時とも該当す

る頻度が全体の約40%にとどまった結果にも反映されている。既述のように、Exnerが示す非患者成人のGHR:PHRの典型的な比は5:1である。一方、岸本・小西(2001)や小西(2002, 2003b)の結果、および、本研究の結果を総合すると、わが国では、 $GHR:PHR = 3:1 \sim 5:2$ の範囲内が平均域といえる。ExnerによるHRVの代表値は4であるのに対して、わが国では2~3とやや低い。このHRV値の低さによって、再検査時に、同一の方向性を示す頻度は顕著に多くないと考えられる。

それでは、性格特性を反映する指標として、GHR:PHRを解釈する必要条件について述べたい。HRVの絶対値が4以上であるならば、別の検査時に、GHR:PHRの方向性が逆転することは非常に稀である。この条件を満たす場合に、継時的に安定した性格特性を示すと解釈できよう。

なお、GHR:PHRに限らず、この両辺の格差の問題は、日本人の比率データ全般にいえる。ここで、Exner, Armbruster & Viglione (1978)における比率データの再検査一貫性を参照したい。もちろん、検査間隔期間やデータ数の差異などの要因から、単純には比較できないが、この研究では、5つの比率データの再検査一貫性が、該当頻度によって提示されている。包括システムでは再検査信頼性が低いとされるmやSumYを含む比率データでさえ、両検査時を通じて同一の方向性を示す頻度は100名中59名に達する。その他の比率データでは、全体の77~88%の対象者が、両検査時を通じて同一の方向性を示している。本研究では、データ数やセル数、該当頻度が極めて小さいセル条件の要因などを考慮して、各セルへの該当頻度の等質性に関するノン・パラメトリック検定は行っていないが、Exner, Armbruster & Viglione (1978)における比率データの再検査一貫性はか

なり高い。

ただし、HRの有効に用いるためには、今回の結果のみから、研究知見の一般化や過度な解釈仮説の生成には慎重を要する。今後、対象者数や男女の構成比率²を含めた属性変数の要因も考慮しつつ、検査間隔期間³の厳密な統制など、さまざまな視点からの検証が必要である。

注)

- 1) このレビューの対象論文には、EIIの時系列的安定性を検討したPerry, McDougall, & Viglione (1995)の研究も含まれている。
- 2) 調査研究では、大規模なデータ数や男女比率の等質性などの条件が理想である。ただし、包括システムでは、性差が顕著に反映される構造データはそれほど多くない(例えば、小西・西尾, 1997)。
- 3) 20年以上もの長期にわたる検査間隔期間を設けた包括システムの再検査研究には高橋・高橋(2002)の報告がある。ただし、初回検査時はKlopferに準じた実施法を用いている。

付 記

本研究は、包括システムによる日本ロールシャッハ学会第8回大会(2002)において発表したデータに1事例を追加したものであり、2004年、関西大学社会学研究科に提出した博士論文の一部に加筆したものである。

文 献

- Beres, D. (1956) : Ego deviation and the concept of schizophrenia. *Psychanalytic Study of the Child*, 11, 164-235.
- Blatt, S.J., Brenneis, C.B., Schimek, J.G., Glick, M. (1976) : Normal development and psychopathological impairment of the concept of the object on the Rorschach. *Journal of Abnormal Psychology*, 85, 364-373.
- Burns, B., Viglione, D.J. (1996) : The Rorschach

Human Experience Variable, interpersonal relatedness, and object representation in nonpatients. *Psychological Assessment*, 8, 92-99.

- Exner, J.E. (1988) : Problems with brief Rorschach protocols. *Journal of Personality Assessment*, 52, 640-647.
- Exner, J.E. (1999) : 包括システムによる日本ロールシャッハ学会 第5回大会「ワークショップ」, 東京, 順天堂大学有山記念講堂.
- Exner, J.E. (2001) : A Rorschach workbook for comprehensive system (5th ed.) Asheville, NC : Rorschach Workshops. 中村紀子, 西尾博行, 津川律子監訳 (2003) ロールシャッハ・テストワークブック (第5版), 金剛出版.
- Exner, J.E. (2003) : The Rorschach : A comprehensive system (Vol.1) : Basic foundations and principles of interpretation (4th ed.) . Hoboken, NJ : Wiley.
- Exner, J.E., Armbruster, G., Viglione, D.J. (1978) : The temporal stability of some Rorschach features. *Journal of Personality Assessment*, 42, 474-482.
- 岸本和子, 小西宏幸 (2001) : 包括システムにおけるGHR : PHRについての1考察, 日本ロールシャッハ学会, 第5回大会プログラム・抄録集, 54-55.
- 小西宏幸 (1999a) : 包括システムにおけるLAMB-DAの影響力, 包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌, 3, 53-64.
- 小西宏幸 (1999b) : 包括システムにおけるロールシャッハ変数の時系列的安定性, 心理臨床学研究, 17, 497-503.
- 小西宏幸 (2000a) : 包括システムにおけるロールシャッハ指標の時系列的安定性, 関西大学大学院「人間科学」, 52, 251-264.
- 小西宏幸 (2000b) : 包括システムにおける構造データの時系列的安定性—領域・発達水準・決定因子を中心に—, 日本心理臨床学会, 第19回大会発表論文集, 240.
- 小西宏幸 (2002) : 包括システムによるロールシャッハ諸変数の再検査研究—ハイラムダ・スタイルの要因について—, 日本心理臨床学会, 第21回大会発表論文集, 331.
- 小西宏幸 (2003a) : ロールシャッハ・テストの包括システムにおけるL, 心理学研究, 73, 502-505.
- 小西宏幸 (2003b) : 包括システムによるロールシャッハ諸変数の再検査研究—ハイラムダ・スタイルの要因について (2) —, 日本心理臨床学会, 第22回大会発表論文集, 224.

- 小西宏幸, 岸本和子 (2001) : 包括システムによる高校生データの1例. 日本ロールシャッハ学会, 第5回大会プログラム・抄録集, 52-53.
- 小西宏幸, 西尾博行 (1997) : 包括システムにおけるロールシャッハ諸変数の性差. 包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌, 1, 34-40.
- Lilienfeld, S.O., Wood, J.M., Garb, H.N. (2000) : The scientific status of projective techniques. *Psychological Science in the Public Interest*, 1, 27-66.
- 森田紀之 (1993) : Exnerの包括的システムによるロールシャッハ変数の信頼性について. 関西大学社会学研究科修士論文 (未公開) .
- Perry, W., McDougall, A., Viglione, D.J. (1995) : A five-year follow-up on the temporal stability of the Ego Impairment Index. *Journal of Personality Assessment*, 64, 112-118.
- Perry, W., Viglione, D.J. (1991) : The Ego Impairment Index as a predictor of outcome in melancholic depressed patients treated with tricyclic antidepressants. *Journal of Personality Assessment*, 56, 487-501.
- 高橋雅春, 西尾博行 (1994) : 包括的システムによるロールシャッハ・テスト入門—基礎編. サイエンス社.
- 高橋雅春, 高橋依子 (2002) : 20数年後の再テストによるロールシャッハ・テストの変数. *心理臨床学研究*, 20, 169-179.
- 高橋雅春, 高橋依子, 西尾博行 (2002) : ロールシャッハ形態水準表—包括システムのわが国への適用. 金剛出版.
- Urist, J. (1977) : The Rorschach test and the assessment of object relations. *Journal of Personality Assessment*, 41, 3-9.
- Urist, J., Shill, M. (1982) : Validity of the Rorschach mutuality of autonomy scale: A replication using excerpted responses. *Journal of Personality Assessment*, 46, 450-454.
- Viglione, D.J., Perry, W., Jansak, D., Meyer, G.J., et al. (2003) : Modifying the Rorschach human experience variable to create the human representational variable. *Journal of Personality Assessment*, 81, 64-73.

*

*

*

付表 HEVとHRVのアルゴリズムおよび良質(Good)と貧質(Poor)の分類法

HEV	HRV
1. すべての人間反応内容：H, (H), Hd, (Hd), Hx 2. 決定因子にMを含むすべての反応 3. 特殊スコアのCOP, もしくはAGがコードされるすべてのFM反応 以下のステップによりGHE, もしくはPHEと決定していく。 1. 以下の2つの条件にすべて該当するPureH反応はGHEとする。 (a) 形態水準がFQ+かFQo, FQu (b) 認知的特殊スコア*がコードされない。 2. 以下の3つの条件のいずれかに該当する場合はPHEとする。 (a) 形態水準がFQ-である。 (b) ALOGかCONTAM, あるいは, LEVEL2の認知的特殊スコア*が1つでもコードされる。 (c) AGかMORがコードされる。 3. 残りのHEVで, 以下の2つの条件のいずれかに該当する場合はGHEとする。 (a) III, IV, VII, IX図で平凡反応(P)がコードされる。 (b) COPがコードされる。 4. 残りのHEVで, 以下の3つの条件のいずれかに該当する場合はPHEとする。 (a) Hは存在せずに(H)かHd (Hd) Hxで成立している反応 (b) FABCOM か INCOM, DRをとまなう (c) 無形態反応(FQ none) 5. 残りのHEVは, すべてGHEとする。	以下のステップによりGHR, もしくはPHRと決定していく。 1. 以下の3つの条件をすべて満たすPureH反応はGHRとする。 (a) 形態水準がFQ+かFQo, FQu (b) DVは例外として, 認知的特殊スコアがコードされない。 (c) AGかMORがコードされない。 2. 次の2つの条件, いずれかに該当する場合はPHRとする。 (a) FQ-もしくは無形態反応(FQ none) (b) ALOGかCONTAM, あるいはLEVEL2の認知的特殊スコアが1つでもコードされる。 3. 残りのHRでCOPを伴う場合はGHRとする。ただし, AGがつかない。 4. 残りのHRで, 以下の2つの条件のいずれかを伴う場合はPHRとする。 (a) FABCOMかMOR (b) Anの反応内容 5. 残りのHRで, III, IV, VII, IX図で平凡反応(P)がコードされる場合はGHRである。 6. 残りのHRで, 以下の2つの条件, いずれかを伴う場合はPHRとする。 (a) AG, INCOMまたはDR (b) Hd < (Hd)ではない> 7. 残りのHRはすべてGHRとする。

*: 認知的特殊スコアは, DV, INCOM, DR, FABCOM, ALOG, CONTAMを指す。

*それぞれの頻度を合計し, GHE:PHEの比を求める。
 GHE:PHE=5:3のように, 比率データとして示す。
 * HEV得点を算出する。
 公式 $HEV = 0.51 \times PHE - 0.75 \times GHE + 0.04$
 HEV得点が正の数値 (HEV > 0)を示すと, 対象者の短所として評価される。

*それぞれの頻度を合計し, GHR:PHRの比を求める。
 GHR:PHR=5:3のように, 比率データとして示す。
 * HRV得点を算出する。
 公式 $HRV = GHR - PHR$
 HRV得点が負の数値 (HRV < 0)を示すと対象者の短所として評価される。

Viglione et. al. (2003)より一部抜粋して作成